風羅念仏　東武　二

へ 5
1897
2

ふるいけの巻

歌仙行

古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉翁

まこと萱角ゟ山吹ハ八尺あ　暁瑩

旅居して春秋夜浅く寐　蓼太

廿日亥中の片町乃月　菅奴

おく秋しと一二羽鵜やたゝし　雪凍

春深きのむ蛛ふて川き　完来

発心者やつれなしたり手提て　黙我

蕎麦粉持余乃客まくら　耳谷

かし井に旅者塩衣干わたし　其牛

秋色硫黄の燃ふ山々け　以文

業平乃いふつき顔ふあてやかは　三駱

子規まけ恵に盆鏡して　沙羅

さゝ浪に塩とふるまふさし蟹　古音

高簾人は花ゝ国ひけるに　揚江

よし野なれ吸物椀に塩さゝて　一兆

還ちいろめく花乃入お　嵐亭

棄あふて寝めれ月もとき眼鏡　普成

捨ふくそこにてやわらかれ貝　彭壽

ひとしみ出合かしらにこぼれ　菊太

きらすと置き廓さびしけ　月村

蝕しつれ多に切大乃銅たるひ　月毛里

まる余尼乃尼子はらくれ　東舎

流れ寄る六浦の浮木かきよせて　班象

雷たゝしぬ花色乃山　雨静

荒武士乃長生侘ゐる孫庇　方壺

酒気くとありかへ花とると　あや足

秋風乃居掃あらぬたひらを　兒鳥

渡廊ひろく槻切石　亀治

月讀乃宮雀なとわらひも　在武 旧国

一さし舞て扇おらせん　祇風

秋乃風戸させ乾岡を押ひらき　子興

嬉しさ手淡ゝ乃松葉かきよせ　汀雨

沢庵乃記念なりしの仮名法語　百鏡

便なりく利根乃川舟　分之

よもめくは花の三十三ケ國　不騫

いさ友よせん蝶もしてると　一鷺

右

雪中庵連

かはをそまき

かまくらを活て出けん初松魚　　芭蕉翁

扶唱字味よき比比乃麦　　暁臺

貝吹けた牧野の亭子に競来て　　烏明

大谷み下やたゞ楔なり　　泉之

悚もえや木からしの風月冴れ　　百明

きりくへなく兼朶橋のゆき　　千鯉

逢はんとの母が作に旁つけて　雨和
新酒あれ乃とめやせんかな　江尤
酒瓶をかくさうとてのかしこまり　素風
ものしけりかなれた丈引舟　勉之
恵らとき鳴神わらう傚面　春圃
多羽田に五位の舞走りけり　鳥明
貫訓し風呂敷いらき江湖僧　泉之
走りちらかる志ら浜か自　江尤

懸しさか大縄ハ露に為よしき　千鯉
網ほしふれし浦乃明かの　雨和
山かつ乃花ハいつこそひろし恵　勉之
わかき男の雛乃菓子と　百明
春毎に侍下おかとひ出る宮　素風
杖曳あらぬ七野社手　春圃
かとく声に夢ばかり書かる置え　江尤
麦の穂風のそいるはかす姿　雨和

佐殿も手借れらかしき飯　百明

目釘を削る雨のつれ〳〵　鳥明

いさらハゝふも秋市に湊ハ人　千鯉

えせ附おこ氏猿乃筍けり　勉之

重借ふ大くもとゝに小くもり　泉之

鎮絶ゑる泪のひんゝん　江左

まてくおとをまてハ月五更　素風

投り屈りしゝ急に礼を　勉之

鏃釣きものいふすも嬉ハれて　千鯉

むくいかへとこける相口　泉之

さむしろに通秋の板の間浅諸　素風

十八日もよき日和そや　百明

旅立を送る人丈も花人　雨和

まるこのところ梅若菜人　春圃

右

松泉庵
玉諸庵　連

附う経の表

名月や門へさし来る潮かしら　芭蕉翁

額てうる軒鴫なあしる　暁臺

それすゝき落馬乃人も帰気なくて　二滇

肩に羽織を乱てよる祭　女　汀亀

雲のみ夕ちされてかゝの空　翠如

椽ゆちゝく論語はしまる　鯉十

酒の吐息うしろの松に吹ちらし　耋
支離になりとし三人ゟ点　如
薫ゑみの娘惜き翠簾乃ひま　亀
一字かへしみいらへたちまち　滇
はれてより雨の袂をまたふるに　十
冬至の與乃梅をし出なから　亀
舩よする岸に猿の啼きて　如
雪ふりく法のむしろさらん　耋
公達を連て侍従みちぬひ　滇
夏おとろきて夜話伺ふ　十
花の上曉月乃一くさみ　亀
雁さらく去のあとし小田　め
吸付た煙管に蝶の羽を休め　十
庭のさし図に瑞石めされて　滇
院よりも賀を給りし眉の霜　耋
かさしにそれや加茂乃挿葵　亀

行なる盤渉調乃ゑきまかり　如
藁を貫て別まもくろき　十
せこそりてなほしといふそ安けなは　湏
ほゝみか翁て鶏卵つふ後し　如
蓬生に細なはし隠し妻　亀
犬か流れて死へしと泣く　臺
いかなれく青松月のお出やしき　十
名利の偕乃梨子頃せし　湏

四戸の亭老に鎖て蔦のかゝは　如
脊伸をさ行くゆたる古様　亀
なふも来ぬ代の嘴よりいゝ合ひ　臺
蜥蜴鳴て乾く秋風　十
いまや露るをも含てむかける　湏
案わけ入酸中の吟　執筆

右　二湏亭與川

しくれ法はき

けふはかり人も年よれ初しくれ　芭蕉翁

芝生かくれ年冬乃治草　曉臺

枚麻の角おしつ転ねとひて　白雄

廿日も過し月の傾き　祇室

垂み秋手も通されぬちゝ麻　梅夫

砂利もちをして庭造せん　烏白

日永し山いとしつかなれ風わたる李　梅谷
被衣のうちに浅る志ら髪　洗耳
しちにふり車のかへさ火ともして　柏樹
門柳枯れし二度乃宮ふ旅　夫
戯れに居士をおとひぬ古鍋鼓　菴
読経るかと兒はむ川う里　谷
帆志ぬしも同しおとの四国船　室
占言むなり　蓋黄昏　樹

志みじく洗へるきぬの袖白し　鳥
ふる川にわれし岩の湯あと　耳
雲低く花に跡月かくす之　夫
今法ときゝて一飯をこふ　菴
祖師の難忘ちて門徒の歎合ひ　谷
菅年追出し女馬いふいて　室
なとらひ断乃縁もし隔てけり　樹
鯀のはしまを渡上りて待　鳥

なき人とゆかるに逢ふ旅のそら　　耳
綾衣の鏡くもりし　　丈
絵まちかう思ひ出しさんさよも　　蚕
おめあし雨更てしきりに　　樹
浦寂し明波をとま舞　　室
寺をめくりて袖と払ひけり　　谷
細工場に一寐入して昼の月　　鳥
粟虫もちる萩の下風　　耳
鳴合てせ移なかるぬくつれ橋　　丈
わりなき衆を暑者の貧まれ　　蚕
親よりはふもつれ世話を　　樹
三日跡らし不二を見そめた　　室
紀藩や茶子宗の蝶もよし　　谷
人のぬることを筆子汲時　　白

右

為麻布大谷連

梅亭 天府

鳴海

踏る足や汗も志保見ん鳴海かた

笠寺

かさ寺や福よき秋気旅日和

雨中の佐屋まいり下
翁の句おもひおこす

淋しさハ古翁もかくや秋の雨

四時之吟

池水をこゝにはしめやこほれ梅　不騫

出やりは篗をもぬける芽柳かな

身の嫁を負てかゝなり収穫飯

しら露や友ありつへき　小田の鶴

○　雪中菴連

黄昏やゑ田路中路文所　普成

咲やすき秋乃花なり郭公

初丁や落るこなたに松一木

友猿たてゝすな海とゆかり

聨手血戯そゝきかゝり雪丸　默我

春を追へハ鐘のきこゆる梅の門

寒念仏同の蒐ふへ人ハきゝ　在江戸　旧国

警蹕
さきおふや襟のあたりをなかとなれ　沙羅
くれなゐの簾裏を残り帰花　三駱
おかふ串眼よりかゝれ桜かな　月守
まほろしに簪光る焼篝かな　あや足
繋かりとハよも志らし月乃前　方壺
夕帰て遷都の跡乃霞かな　一兆
おやまなれてへハ何の花に鳥　班象
をとこなり実女なり松に菰　子輿
書もなくりに芝や古暦　分之

秋としも秋まて浮かぶ螢の宿　汀雨
かさゝきに雛鳥宿し毛の風　百鏡
葵かゝみとりつくや青籬　楊江
末枯や人とふ何木の八ゝ祉　東舎
桑に芽を占ふ里や春の雨　彭壽
たせ我忘や世をかさねて硯　菊太
咲かぬ桃子きゝふの夕日かな　紙風
一寸の戸も仏ある梅乃花　雨静
玉味噌の胡椒くさき白かな　古音

剃刀にもきくひらり罌子花　月村
麦畑に芙蓉の余れ似より　亀治
菖にも桜恋しき黒かれ　萱奴
なかましてあるきのあらん朧月　武義女　耳谷
鵯むとり破船の緒の汐干かな　日　甚牛
橋や江連綿て御幸門　日　以文
新しき簑見ておかしき粧おかし　阜如
夊竹の水より出より夏の月　竹史
夕鯨や蟹もくましぬ日みそえ　兒鳥

うしろ須みる筆の光や国のひま　雪凍
霞ほとしみぬ舟もかゝ遠し雪の海　乾字
いりの名に柳となりてみゐるかな　亞柳
かさりに決めるらくさこころ　文李
菊や菊の露にもそうまらん　女　須義
秋はん金や菊抱云ハきふの筆　風馬
秋風みや灯にすそ見ん　小進清　稜川
癖みな舞毒きを山乃姿かな

隣の家哉吹越声や小夜衛

まるらしめよや志つめて見こそ　威鳳

りんもちやし秋ら何めしるより

一寸にして茶のさし荳の那　巴丈

月客な一振二夜や外の妹

麻にも枷並そめ何菱さらう

かしおと男の爽子田植られ

昼魚哉花乃宿あり仏空

萩かな哉月よりさびし言悦哉

八節や外年ぬり春の色

茶よりも人にハとしきかし

こかくしや月吹くて旭を

百たくり門たろうす哉客られ

櫻梢にも橋ハかなふて貸小袖　女 茂兮

手習にむてり附や雛子の声　八才 尤香

○

炭売は小世の古店かよひけり　月巣

浪を衝沖中川や秋の名　魚文

羽子つきし子の子なりけり凧　嵐亭

友かへてまろひおくり夕桜　宜麥

汐干さへ友余りきん川千鳥　文母

雨に啼音もおほろ哉皐月に　完来

あさうに砂かふ白けり孫の菜　雪中庵　蓼太

水やまなんひたりの兎子競けり

士松菴連

○

梅の枝に鶯来て啼世中に　千鯉

蛛日和鶉を散沖の出そまり

小松原梅に芽出しの先の花　勉之

御房や板東に雨の秋もさら

春のまし来啄む鳥はさしにつく　士松菴　百明

卞戸は志らし渺みちの水の味

○

松露庵連

猿ひきに笠振向やわか菜摘　泉之

いなつまや大路掃る市の跡

咲そめて三日余りや花椿　兩和

いなつまやこちらの山ハ月か出る

木母寺の念仏過ぎり春の月　江尤

吶かし乃居啼過ぬ窓ゐれ

五月雨や足にまとく古函　素風

榾の火やなそ足し光か接ぎ

雪解や襟え拭ふ門の口　春里

松とれて衛まち乃ゑ取かれ　雨柴

かのくと柳楽る日和かな　兀雨

一寸乃麦に風あらく見難かな　春圃

花盞満足な日をたのしみり　松寿庵　鳥明

子ゑ乃やとのしき道の火お鉢

紅川や梅見て通ふ楼窓　二眞

夜汲巾こうてぬふとふまいそ

江の月や這ありくる秋の舟

日乃影や墨絃の橋手消て隈

並松を茸ま見おろす雲雀かな　鯉十

贅女ハ拝手ちひさき袖や辻ヶ花

なヶき秋や茅桶へ汲をはぬ井筒

蛛の巣乃禁きとめても落葉かな

うきくさのをよりとめり細なかれ　汀亀

○

多摩郡大谷連

蝶出とり出てり留るの鎖かれ　祇室

何仏なくも並り床子の南

はつ汐や湯乃社売ぬちらむき

立の日や篠原くは鳥一羽

松よりも梢よち越ていろの布足　改流　渓林

山ゑゝ那須かれはなりて　文衣

いなつまや田の畔くの柵かけ

よ乃名乃志らぬ知恵あり鶺鴒

青葉して又めく新岩かな　成瀬 梅都

世をすてしやうに世にあり神無月　青江

雪の日を名さまくに蕾かな　青流

鳴ちとり月は山の端にかゝりけり　梅谷

春乃風ふくよすからを樹の匂ひ　雪窓

地に雲のちるこけありや天は落　初風

人をしたふかれとくきも啼　五英

啼ろに瓦ふくものかんことり　長津田 芦冠

暮や梢たかまる名木哉　七人 富喆

ゆふのはや柿そろいぬ[illegible]　可明

撞かのかにてや志の[illegible]啼　木曽 巴皐

此際ミ道にちるなり稲乃花　忍田 桃覺

麻刈し秋の麻こゝろや新の雨　岨岑

おさゝかやかつへくて数たらず　東水

刈人はそぎ所見ゆる青田かな　桃里

落栗や家のとぎれの古井桁　万里

冬寒や藁塚も清き縄かけ帯　和水

紙衣やおもへちまち花信ひ　町田 烏白

傘提てぬれ行春の小雨かな　大谷 梅夫

見るうちにさびしうなりぬ杉楢
露あふれ花咲乱れ畑のおもかハりて
流れ行井や石菖の根の知識

おかつそむきあふ秋へ秋初嵐
木の葉さくかふ秋上の落葉かな　曉臺

書林
江戸室町三丁目　須原屋市兵衛
京寺町松原上　辻井吉右衛門